今金地域研究　第３号　１－13ページ，1997
Bulletin of the studies in Imakane district, №.3 p. 1－13, 1997

黎明期の神丘

卜部信臣[1)]

Beginnings of the Kamioka village

Nobuomi URABE[1)]

１．はじめに

今金町神丘は，キリスト教徒による開拓地として広く知られている．「北海道開拓秘録（若林　功，1964）」にもややセンセーショナルにその開拓の過程が収められているが，本論では実際の神丘への入植が北海道の開拓政策とどのような関わりを持っていたのかを見ていくこととする．

２．北海道殖民地選定区画後志国利別原野“中「トシベツ」原野”

北海道殖民地選定区画事業は，移民を入れる前に農業適地を調査，区画して全体計画に基づいて進めたところがこれまでの開拓政策と根本的に異なるものであった．調査を担当したのは札幌農学校第１期生の内田　瀞，柳本通義の近代科学を身につけた新進気鋭の者であった．この事業は明治１９（1886）年から始まり，後志国利別原野は明治22（1889）年に実施された．利別原野は，上「トシベツ」原野，中「トシベツ」原野，下「トシベツ」原野に分けて報告されているが，神丘地区は，中「トシベツ」原野である．資料1に示す通り「地理」，「土性」，「植物」，「排水」，「用水」，「運輸」の項目について調査結果が報告されている．

３．犬養　毅外８名の土地貸下後志国利別原野　“中「トシベツ」原野”

従来，志方之善，丸山要次郎が未開の地を探検して神丘の地を探し当てたように書かれているものが多いが，実際は測量し，区画を終えた土地への入植であることを明記したい（資料１）．

当時の国会で発言力を得るには，大土地所有が最も確かな手段であるため，北海道の未開地に中央の政治家が食指を動かしてきたのであるが，神丘のイヌカイチもそのひとつであ

第１図　未開地貸付台帳
（北海道庁、明治19～27年）

[1)]新十津川町立吉野小学校．Yoshino junior school, Shintotsukawa, Hokkaido, 073-13 Japan.

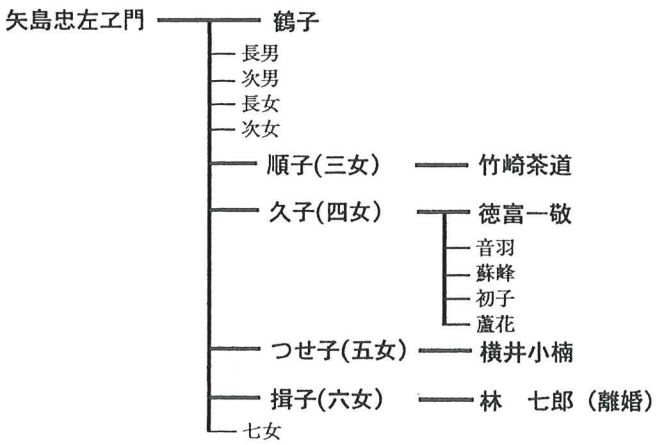
った．改進党の犬養　毅外８名が明治24（1891）年３月12日後志国利別原野“中「トシベツ」原野”2025万坪の貸し下げを受けている．犬養　毅が代表であったため開拓期の人々は，ここを「イヌカイチ」と呼んでいた．犬養　毅，尾崎行雄と言えば，薩長藩閥政治を鋭く批判した論客であったが，その彼らが薩摩閥の巣といわれた道庁を通して，大土地所有にのりだしたことは，注目に値する．第１図中の田中賢道とは熊本県自由党の領袖であり，一木富太郎は田中賢道の秘書である．土地の貸し下げ地は，まちがいなく開墾を終えたという成功検査を受けて，払い下げになるシステムになっていた．当時は，土地の貸し下げを受けても，開墾が思うようには進まないのが，現状であった．この貸し下げを受けた土地をどのようにして，開拓を進めるかが大きな課題となっている時に，志方之善等の動きが出てくる（殖民地撰定報文の10年後は殖民状況報文に詳しい；資料２）．

３．志方之善，北海道開拓を志す

志方之善は，元治元（1864）年７月17日，父之裕，母ヨリの長男として熊本県山鹿郡来民町（現山鹿市）に生まれた．14歳の明治２（1869）年義兄長平を頼って神戸に出た．彼は神戸で英語の学習の後，陸軍教導団に入隊した．教導団には２年いたが，胃弱のため除隊した．失意のどん底に落ちた志方之善に救いの手を差しのべたのは，彼の親族のひとり鈴木陸軍大佐であった．鈴木は，志方を新島襄に紹介し，同志社の普通校に入学させた．同級生の藤原直信に勧められて新島邸の家庭集会に参加．明治19（1886）年に新島　襄から受洗して同志社教会の一員となり，その１年後に伝導者を志して同志社神学校に入学した．明治23（1890）年同志社の創立者新島　襄は大磯で病に倒れ，志方之善等が看病をして尽くしたが明治23（1890）年１月23日息をひきとった．遺言は徳富蘇峰の筆で書かれた．１月24日柩を京都に運ぶ列車の中で志方之善は，初めて徳富蘇峰に会い，「君のことは，遺言の中にもあったよ．」と声をかけられる．１月27日新島　襄の葬儀が行われ，志方之善は南禅寺から若生寺の墓地まで柩をかつぐ一員であった．葬儀には，京都府知事北垣国道も参列していた．北垣国道は，このあと北海道長官となり，貸し下げだけを受けて開拓の進んでいない土地を返還させたことで有名である．また，金原明善とも親交があり，貸し下げを受けて開拓の進まないところを犬養　毅に返還させて，そこを金原明善のものとしたことでも，直接神丘の黎明期に関わる人物である．「新島先生のなき同志社は廃屋も同然だ」と志方之善は，同志社を中退する．そしてキリスト精神に基づく北海道開拓に向かう決意を固める．北海道開拓を実現するために志方は，同郷の先輩である大宮教会の牧師大久保真次郎夫妻を訪ねた．大久保は，徳富蘇峰，蘆花の義兄である．志方の決意を聞いた大久保の妻の音羽は，荻野吟子に紹介状を書く．

４．荻野吟子

日本女医第１号の荻野吟子は，嘉永４（1851）年に埼玉県大里郡妻沼町に生まれた．明治元（1868）年19歳の時，稲村貫一郎と結婚する．明治３（1870）年協議離婚．明治８（1875）年東京女子師範に入学．明治18（1885）年医籍に登録され日本で女医第１号となり，明治19（1886）年には海老名弾正から洗礼を受けてキリスト教徒となって，キリスト教婦人矯風会に参加



第２図　夫人覚醒運動にかかわった矢島家ゆかりの人々

資料1　北海道殖民地撰定報文（資料提供：北海道出版企画センター）

瀬棚郡上「トシベツ」原野

地理

四圍皆山脚ニシテ「トシベツ」川ノ上流「ナボハツタラ」ヨリ下流「ペンケハカエマップ」ニ至ル左右沿岸ノ地之ヲ上「トシベツ」原野トナス其内較々廣キ野ハ「ピリカベツ」「チユウシベツ」「トシベツ」ノ三川會合スル所ノ丘陵地乃チ其近傍砂金ノ埋沒スル所ナリ其他ハ僅ニ「トシベツ」川ノ屈曲間ニ散在スルノミ而シテ小川ハ左岸ニ位スル「サクルベシベ」「シユプンナイ」「チンクヒテヒ」及「ルートラシナイ」等トス

面積

百五拾貳萬九千貳百六拾坪

土性

右肥沃ナル樹林地ナルヲ以テ耕作ニ適スル所ナリ

樹林地

土壤六寸乃至三尺ノ新冲積層平均二尺二寸余アリ層中上土ハ三寸乃至七寸ノ黑色腐植土下土ハ壹尺乃至二尺三寸ノ褐色砂性壤土ニシテ前陳三川合流ノ地方ハ土壤深ク地味モ亦膏腴ナリ然レトモ砂金採掘ノ爲メニ往々土地磽确ナル處アリ

植物

近傍沿岸ノ樹林ハ概シテ榆、樺木、楓多ク山胡桃、桑、剌楸、檜、白楊、柳、赤楊、菩提樹、黃蘗、朴、サビタ、カタスキ山毛欅、オホバイラクサ、劉寄、奴草、款冬、虎杖等ナリ而シテ河畔肥沃ノ地ハ草木概シテ生長佳良ニシテ榆ノ如キハ圍六尺乃至九尺アリ若ハ高五尺乃至六尺余虎杖ハ一丈五尺五寸アリ樹林ハ一段歩二十本乃至四十本許粗密アリ山邊濕地ハ枸骨科蓴麻科ノ草木菊科ノ雜草類多シ

用水

水流ハ本支共ニ清澄ナルヲ以テ飲用ニ供スルモ可ナリ唯左岸ノ細流ハ水色微褐ノミ而シテ上流ヨリ引水スルトキハ灌漑ハ自由ナルヲ得ベシ

運輸

斯地ハ「トシベツ」川口ヲ距ル十八里拾貳町許「ルートラシナイ」ヨリ東濱山越路「クンヌイ」ニ至ル五里三拾壹町許昔時採金ノ際ハ專ラ道路ヲ「クンヌイ」ニ開キ以テ相往來セリ「ルートラシナイ」ヲ踰ユル細溪アリ茶屋川ト云フ蓋シ當時茶屋ヲ建設シタル所ナリト瀬棚「トシベツ」ヨリ浜上スルトキハ小礒舟ヲ以テ辛行スルヲ得ベシ後來西海岸ノ「トシベツ」ヨリ東方「クンヌイ」濱ニ道路ヲ開鑿セサルヘカラス若其道路ニシテ落成スルトキハ則チ始メテ運輸ノ便ヲ得ベシ

中「トシベツ」原野

地理

南北ハ「トシベツ」川左右兩岸ノ山脚ニシテ東ハ上流「ペンケハカエマ」及「チンネハツタラ」ヲ以テ上「トシベツ」原野ト界シ西ハ「メナ」及「フミルイ」ノ支川ニ由テ下「トシベツ」原野ト隣接ス地勢東西ニ長ク南北ニ狹シ唯其廣濶ナルハ同川左岸ノ「チイヂヤンヌベ」右岸「メナ」地方ナリ其「フイタウシナイ」「パンケハカエマップ」「ネープ」「プイタナイ」「チプタウシナイ」「トマムケシ」「ペンケチエホツナイ」「メナ」等ノ支流ハ北方ノ山脈ヨリ流レ「カテマナイ」「ペンケチイヂヤレヌベ」「ペンケチイヂヤンヌ」ノ派川ハ南方ノ諸山ヨリ來リ地形丘陵、濕地泥炭地等ノ別アリ蓋シ斯地ハ「トシベツ」河口ヲ距ル十一里余ノ上流ニ位ス

面積

九百三拾貳萬百五拾三坪

內

七萬三千五百坪	丘陵草原
百八拾六萬七千六百七拾三坪	仝林地
三百七拾七萬六千三拾坪	河岸林地
七拾五萬坪	仝草原
貳百八拾五萬貳千九百五拾坪	草原濕地 但泥炭アリ
右丘陵及河岸ノ草林二原野ハ農業ニ適シ濕地モ亦排水後耕地トナスヲ得ベシ	

土性

土壤ハ壹尺乃至四尺ノ冲積層平均貳尺七寸余層ノ上部ハ壹寸乃至六寸ノ茶褐色腐植土下壹寸乃至三寸五分ノ火山灰下部ハ七寸乃至貳尺四寸ノ砂性壤土或ハ粘性壤土其下層ハ赤色粘土或ハ砂礫トス蓋シ「メナ」丘陵ハ火山灰層極メテ薄ク五分乃至七分ナリ而シテ皐濕地ハ三尺乃至九尺ノ冲積層平均八尺其積層ハ壹尺ノ壚質土貳尺ノ泥炭質壤土三尺ノ泥炭下三尺ノ青色軟性粘土ニシテ或ハ貳寸ノ壚質土三尺六寸ノ泥炭質壤土下九尺以上ノ泥炭或ハ上部ヨリ直ニ泥炭ナル所アリ但シ泥炭ハ朽腐セリ又積層中六寸乃至八寸ノ火山灰アリ

植物

榆、山胡桃、桑、白楊、楓、柳、檜、剌楸、菩提樹、黃蘗、朴、赤楊、樺木、桃、蕁衛矛、サビタ、撫木ノ雜木林下等ヨブスマサウ、劉寄、奴草、シモツケサウ、蘆、ヤマソテツ、澤瀉、虎杖、菰草、茅、蔟芝、小蘭ノ雜草トス林中圍五七尺ノ柳三尺ノ赤楊八尺乃至壹丈ノ檜四尺ノ樺木等ハ大樹トシテ見ル所ナリ平均壹段歩拾本許「メナ」丘陵ノ如キハ幾ソト草原ナリ又無木ノ濕地ニ、ヤチヤナギノ灌木アリ林地ニ山葡萄ノ樹間ニ繞フアリ而シテ皐ハ高原ニ薄ク低地ニ厚シ其肥沃ノ地ハ蘭草モ亦生長佳良ニシテ高サ壹丈餘ノ虎杖六尺ノ劉寄奴草五尺乃至六尺ノ菩アリ

排水

「トシベツ」川左岸皐濕地及「トマムケシ」ノ濕地ハ排水ヲ要ス地勢漸ク東西ニ傾斜スルヲ以テ其方向ヲ取リ排水溝ヲ堀設セサルヘカラス否ラサレハ却テ河水ノ浸入ヲ催スコアリ

用水

4ページへ

「トシベッ」川ノ右岸ハ小流概シテ清澄左岸ハ之ニ反ス殊ニ「メナ」川ハ冷清夏時掬飲スルトキハ頗ニ苦熱ヲ去リ身神爽快ナリ其温度ハ攝氏九度二許ナリ丘陵ハ灌漑ニ不便ナルモ其他ハ自由ナリ

運輸

此地「トシベッ」河口ヲ距ル水路拾壹里拾四町許「メナブト」ニ至ル六里許路來道路ノ開設ヲ必要トス若シ下流ノ馬駒内ヨリ新道ヲ開通スルトキハ此地ニ至ル三里半許ナリ

下「トシベッ」原野（太櫓川上流ノ原野モ此中ニアリ）

地理

東ハ中「トシベッ」原野ト「メナ」「アミルイ」ニ界シ西ハ灝栁海ニ瀕ス南北ノ兩端ハ山趾ナリ之ヲ下「トシベッ」原野トス地形東西ニ長ク南北ニ短シ其小川ハ「ユウプチ」「パンケチエプソナイ」「トマンベッ」「チヤチ」「マコマナイ」等トス「マコマナイ」ハ「トシベッ」川支流「メナ」ニ亞クノ清川ナリ「チヤチ」近傍ハ丘陵ニシテ延テ海濱「モナイ」ニ至ル而シテ太櫓川上流水路四里三十二町許ニシテ兩岐トナル處ヨリ下流「コモナイ」ニ至ル間僅少ノ樹林原野アリ太櫓郡ニ屬ス

面積

五百貳拾貳萬五千九百四拾坪

内

九拾五萬四千八百六拾坪　丘陵林地
四拾壹萬九千貳百八拾坪　同　草　原
貳百貳拾五萬八百坪　河岸林地
五拾五萬坪　同樹林濕地
五拾萬坪　同草原濕地
五拾五萬千坪　太櫓川林地

右草原林地ハ農業ニ丘陵ハ牧場ニ適ス但シ濕地ハ排水ヲ要ス

土性

土壤ハ各處多少ノ厚薄アリト雖ヒ河畔ハ壹尺三寸乃至六尺ノ新沖積層平均三尺五寸余アリ上部ハ三寸乃至七寸ノ塡質土或ハ腐植土下壹寸五分乃至二寸ノ火山灰下部ハ壹尺乃至五尺余ノ泥炭質壤土或粘性壤土其下軟和ナル粘土トス卑濕地ハ六尺乃至九尺ノ沖積層或ハ泥炭層平均八尺以上アリ其上部ハ五寸乃至八寸ノ塡質土下五寸乃至四寸余ノ火山灰中部ハ二尺九寸乃至三尺八寸ノ泥炭質壤土下部ハ二尺乃至四尺以上ノ泥炭ナリ然レトモ中部往々粘性壤土ヲ挿夾スルアリテ下青色粘土ナルアリ而シテ「チヤチ」近傍ノ丘陵ハ二尺三寸乃至二尺八寸平均二尺四寸余ノ沖積土土中上部ハ壹寸五分乃至三寸ノ腐植土下壹寸乃至二寸ノ火山灰下部ハ二尺余乃至二尺三寸ノ粘性壤土以下粘土ニシテ色赤白アリ但赤ヲ多トス

植物

楡、櫸、赤楊、水楊、黄蘗、桑、刺楸、楓、七葉樹、山胡桃、朴、菩提樹、樺木、檜、栗、辛夷、黄櫨、カタスキ、桃、葉衛矛、サビタ、土常山、水腦木等ノ雜林ニシテ樹下劉寄奴草、ヤマソテツ、蕺、澤瀉、劒音蓮、シモツケサウ、ヲホバイラク、虎杖、茆草、クサフヂ、ヱゾニウ、萩、蕨、艾、款冬等ノ雜草トス樹間往々猯、猴、桃、山葡萄ノ纏繞スルアリ而シテ土地ニ因リテ林相ヲ區別セハ概シテ河畔ハ楡、櫸、濕地ハ赤楊、矮小柳、丘陵及山趾ハ菩提樹、樺木、檜、栗、楓、七葉樹平原ハ萩、芒、クサフヂ等ニシテ林草ノ地殆ント箭ノアラサル所ナシ又林中ノ大樹ハ圍八九尺ノ刺楸、黄蘗、楡、七葉樹、櫸、四五尺ノ桑、壹丈余ノ檜等アリ雜草ハ高六尺ノ箭、壹丈余ノ劉寄奴草アリテ之ヲ中「トシベッ」原野ニ比スレハ生長佳良ナリ樹林ハ壹反歩四五本乃至四五十本許粗密ナリ「マコマナイ」ノ溪流「サイモヌシナイ」ヨリ山足ニ及ンテ栗樹多シ土人秋季一日壹斗五升許ヲ採拾スト云フ

排水

「ユウプチ」「コケヤケ」「イチプチ」等ノ濕地ハ田圃トナサント欲セハ必ス排水ヲ要ス其放水ハ別ニ東西ニ溝渠ヲ穿タサルヘカラス否ラサレハ「トマンベッ」近傍ハ本川ノ屈曲甚シク動モスレハ逆流スルノ恐レアレバナリ

用水

右岸ノ細流小川ハ概ネ清澄飲料トナスモ不可ナシ殊ニ「マコマナイ」ハ水流美清深淵ノ游魚モ亦能ク窺フヲ得ヘシ現ニ福井縣移住民ハ日常之ヲ飲用セリ而シテ灌漑ハ固ヨリ自由ナリ故ニ灌漑ノ利ヲ計ンヨリハ寧ロ水害ノ憂ヲ除クニ如カス

運輸

此地ハ河口ヲ距ル五里許間ノ沿岸ニシテ舟楫便ナリ「マコマナイ」移民地ヨリ三本杉ニ至ル通路アリ一里二十余町許他日山越郡「クンヌイ」ニ通スルノ車道ヲ開設スルニ至ラハ交通運輸ノ便ヲ得ヘシ太櫓川沿岸原野ニ至ル道路ハ「トシベッ」川「トマンベッ」ヨリ仝川「コモナイ」ノ下流ニ出ツル僅ニ半里許却テ太櫓ヨリ便利ナルベキ乎

資料２　北海道殖民状況報文（資料提供：北海道出版企画センター）

利別村

地理　西ハ目名川及ヒフミルイヲ以テ瀬棚村ニ接シ北ハ島牧郡ニ連リ東ハ胆振国山越郡ニ堺シ南ハ太櫓郡太櫓村ニ隣ス利別川中流以東ノ地ヲ占メ面積殆ント郡ノ大半ニ居ル北方島牧郡境ニハメップ嶽カニカンヌプリ等ノ諸山連峙シテ高峻胆振国境太櫓郡堺ハ共ニ低キ山岳蜿蜒繚繞シ村ノ四囲ハ丘陵峰巒ヲ以テ包ミ西方利別川沿岸纔カニ一方ヲ開ク利別川ハ島牧郡界ヨリ発シ幾多ノ小流ヲ輳合シ迂回曲流シテ瀬棚村ニ入ル流域数里ノ間平低ノ肥地ヲナス支流ニハ上ハカイマップ、下ハカイマップ、メップ、トマンケシ等ノ諸川ハ北岸ニ在リ各々源ヲ北方山岳ニ発シ南下シテ利別川ニ入ルペンケオイチャヌンペ、パンケオイチャヌンペノ二流ハ南岸ニ在リ胆振国境ノ山脈ニ発シ西北ニ流レテ利別本流ニ合スメップ、ペンケオイチャヌンペ、パンケオイチャヌンペノ三支流ニ沿ヒ多少ノ平地ヲ存シ就中ペンケオイチャヌンペハ延里二里ニ亘ル狭キ平野ヲ有セリ

中利別原野　南北ハ利別川左右両岸ノ山脚ニシテ東ハ上流上ハカイマップ及ヲンネハッタラヲ以テ上利別原野ト界シ西ハ目名川、フミルイヲ以テ下利別原野ト隣接ス地勢東西ニ長ク南北ニ狭シ唯其広濶ナルハ同川南岸オイチャヌンペ北岸目名地方ナリ地形丘陵、湿地、泥炭地等ノ別アリ

九百三十二万百五十三坪総面積

内

七万三千五百坪	丘陵草原
百八十六万七千六百七十三坪	同　林地
三百七十七万六千三百坪	河岸林地
七十五万坪	同　草原
二百八十五万二千九百五十坪	草原湿地（但シ泥炭アリ）

右丘陵及河岸草林二原野ハ農耕ニ適シ湿地モ排水後耕地トナスヲ得ヘシ

上性ハ一尺乃至四尺ノ沖積層ノ上部ハ一寸乃至六寸ノ茶褐色腐植土下ニ一寸乃至三寸五分ノ火山灰ヲ狭ミ下部ハ七寸乃至四寸ノ砂性壌土或ハ粘性壌土其下層ハ赤色粘土或ハ砂礫トス丘陵ハ火山灰層極メテ薄シ卑湿地ハ三尺乃至九尺ノ沖積層ノ上部ハ壇質壌土二尺下ハ泥炭質壌土三尺或ハ二寸ノ壇土ノ下三尺ノ泥炭質壌土其下九尺以上ノ泥炭或ハ上部ヨリ直ニ泥炭ナル処アリ

植物ハ楡、山胡桃、白楊、楸、樺、楢、菩提樹、赤楊、樺木等ノ雑木林下ハ箬、劉寄奴、芦、虎杖、茅、艾、蕨等ノ雑草ナリ丘陵ノ如キハ殆ント草原ナリ又無木ノ湿地ニ「ヤチヤナギ」ノ灌木アリ箬ハ高原ニ薄ク低地ニ厚シ其肥沃ノ地ハ雑草ノ生育亦佳ナリ排水ハ卑湿地及トマンケシノ卑湿地ハ排水ヲ要ス地勢漸ク東西ニ傾斜セルヲ以テ其方向ヲ取テ排水溝ヲ穿ツヲ良シトス

上利別原野　四囲山脚ニシテ利別川ノ上流チポハッタラヨリ下流上ハカイマップニ至ル左右沿岸ノ地之レヲ上利別原野トナス其稍広キ野ハピリカペツ、チュウシペツ及ヒ利別ノ三川会合スル所ノ丘陵地乃チ其近傍砂金埋没スルト云フ所ナリ其他ハ僅カニ利別川ノ屈曲間ニ散在スルノミ而シテ利別川南岸ノサックルペシペ、シュプンナイノ小川モ多少ノ農耕地アリ

百五十二万九千二百六十坪　樹林地

右ハ肥沃ナル樹林地ナルヲ以テ耕作ニ適ス土性ハ上土ハ三寸乃至七寸ノ黒色腐植土下ハ一尺乃至二尺三寸ノ褐色砂性壌土ニシテ前陳三川ノ合スル地方ハ土壌深ク地味亦膏腴ナリ然レトモ砂金採拾ノ為メ往々土地磽确ナル処アリ植物ハ楡、樺木、楸多ク山胡桃、桑、楢、白楊、菩提樹、山毛欅、櫟、楢等アリ河畔肥沃ノ地ハ草木概シテ生長佳良ナリ

気候ハ降霜ハ土地ニヨリ稍々遅速アリ上利別原野ハ中利別原野ニ比シ四五日早ク瀬棚村ヨリハ十日早ク概ネ九月中旬ニ結ブト云フ積雪ハ四尺位ニシテ四月中旬ニ融解ス

運輸交通　県道ハ胆振国山越郡ヨリ来リ北岸ヲ縦断シテ瀬棚村ニ出ル里道ニハ北岸ヨリ南岸ニ通スル道路二条アリ一ハ字今金ヨリ大茶羅津辺部落ニ達シ一ハ意満奴恵留部落ヨリ小茶羅津辺ニ通ス南岸ハ北岸ト聯絡スルノミニテ未タ縦断スル幹線道路ヲ設ケス各農場ノ聯絡ヲ欠キ交通甚タ不便ナリ農産物ハ中利別原野ハ瀬棚村市街ニ搬出ス其里程近キハ四里遠キハ八里ニ至ル穀類一石ノ駄賃四十銭乃至六十銭ナリ上利別原野ハ概ネ胆振国山越郡国縫駅ヘ運搬スルヲ便利トス然レトモ道路頗ル不良ニシテ駄送尚容易ナラス一石ノ駄賃ハ凡五十銭ヲ要シ其距離ハ五里十八町アリ若シ此県道ヲ修築シ車輪ヲ転スルニ至ラハ今ノ半額ノ賃銭ヲ以テ尚余リアルヘシ蓋シ本村ノ拓地殖民上道路ノ改善最モ急務ナリトス又本村大茶羅津辺部落ヨリ山越郡八雲村ニ通スル新道開鑿ノ計画アリ果シテ此道路ニシテ成功スルノ日ハ常ニ交通運輸上ノ利便ヲ増スノミナラス沿道之レヲ待テ開拓スヘキ所多カルヘシ

沿革　明治二十三年以前ハ只利別川上流ニ於テ砂金採拾ノ為メ入稼者アリ或ハ鮭漁ノ為メ一時入込ミタルモノアリ同二十四年熊本県人犬養毅等中利別原野数百万坪ノ貸付地ヲ得テ開墾ヲ企テ田中賢道、志方之善等五人及十数人ノ農夫ノ移着セシヲ以テ本村開闢ノ嚆矢トス然ルニ久シカラスシテ事業失敗シ各々離散シテ止マルモノ少ナシ同二十七年加藤政之助ナルモノ犬養毅等ノ後ヲ襲ヒテ開墾事業ヲ起シ同年二十余戸ノ小作人並ニ管理人ヲ移ス又同年今村藤次郎、須田栄治等十数名北海道拓殖組合会ナルモノヲ組織シテチプタウシナイニ数十万坪ノ貸付地ヲ受ケ小作人ヲ募リテ之レニ移ス此年瀬棚、国縫間ノ県道ノ開鑿落成シテ交通運輸ノ便開ケタルヨリ小作人ノ移住スルモノ漸ク多ク稍開拓ノ緒ニ就ク同年駅逓ヲ珍古辺、稚父多牛ノ二ケ所ニ設ケ往来ノ旅客ニ便ス同二十九年中利別原野ノ一部ヲ区画シテ単独移民ノ来住ヲ促シ徳島県人等ノ此地ニ着スルモノ多シ続テ金原明善等七十余万坪ノ貸付ヲ受ケ二十余戸ノ小作人区画地ニ入ル同三十年樫村清徳、金原明善等利別川南岸ニ於テ貸付地ヲ求メ小作人ヲ移ス南岸ノ地始メテ人煙ヲ見ルニ至ル開村以来日尚浅キモ数百戸ノ移民数処ニ部落ヲ成シ益々増殖ノ勢アルヲ以テ三十年瀬棚村中利別原野以東ヲ分割シテ利別村ヲ置キ新ニ戸長役場、郵便局ヲ設ケリ稚父多牛ハ遂ニ本村ノ中心トナリ商賈来リテ雑貨店ヲ開ケリ

戸口　明治三十一年十二月末現在戸数四百十六戸人口千八百七十八移民ハ徳島、岐阜、福井、埼玉、愛知ノ諸県人最モ多シトス「アイヌ」ノ寄留者数戸アリ

部落　今金部落（稚父多牛）ヲ中央トシ戸数四五十戸長役場、郵便局、巡査駐在所、学校、

6ページへ

説教所、駅逓及ヒ旅人宿、小売商等アリ埼玉部落ハメップ、ハカイマップ等ノ加藤政之助開墾地ノ称ニシテ戸数九十余アリ珍古辺ハ最東ノ部落ニシテ戸数二三十旅人宿、郵便継立所等アリ稲穂嶺ノ麓ピリカペツニハ満俺鑛アリ戸数七十余巡査駐在所アリ又今金部落ノ西方区画地内ニ在ルヲ意満奴留意部落ト云ヒ四五十戸其北ノ北金原農場ニ三十四五戸アリ利別川南岸大茶羅津辺部落ハペンケオイチャヌンペ川ニ沿ヒタル樫村及ヒ白石等ノ開墾地ニシテ六十余戸小茶羅津辺ハパンケオイチャヌンペ川ノ南金原開墾地ニシテ五十余戸アリ其他河岸各所ニ青木、宮崎、野本、西田等ノ開墾場散在シ各々少数ノ戸数アリ

農業　明治二十七年以降ノ開拓ナレトモ原野曠漠地味膏腴ナルヲ以テ日ニ月ニ進歩シ明治三十一年末ノ調査ニヨレハ既墾地八百六十八町四反歩アリ一戸平均作付約二町一二反歩ニシテ最モ多ク作ルモノヲ五町歩内外ナリトス作物ハ蕓薹、裸麦、黍、蕎麦、稗、馬鈴薯、大豆、小豆、豇豆等ヲ重モトナス蕓薹、大小豆、豇豆ヲ販売シ其余ハ自家食料ニ供セリ耕鋤ハ倒木樹根ノ為メ未タ馬耕ヲ用ユル能ハス自作小作ノ割合ハ小作者二百七十余戸自作者百五十余戸タリ小作料ハ未タ鍬下年期中ニ属シ未定ノモノ多キヲ以テ其実際ヲ詳カニシ難シト雖モ概ネ一反歩ニ付七十銭乃至一円迄ノモノナラン明治三十一年ニ於ケル本村ノ農産物及作付反別ヲ示セハ

種類	作付反別	収穫高	普通一反歩当リ収穫
蕓薹	一、九五〇反	二、二四二石	一、四〇〇石
裸麦	八九五	一、五六六	一、七〇〇
蕎麦	七一五	六九四	一、五〇〇
稲黍	八五五	三五九	二、〇〇〇
稗	六二五	三七〇	四、〇〇〇
大豆	五五二	二八七	一、五〇〇
玉蜀黍	三四五	三二八	二、〇〇〇
小豆	四八五	二一六	一、二〇〇
豇豆	二五二	一一三	一、五〇〇
小麦	一三五	二二三	一、〇〇〇
大麦	八〇	一六四	一、五〇〇
燕麦	二五	五二五	二、一〇〇
麻	一三	二、三五六	一八一貫
馬鈴薯	六〇〇	二、四七二	五〇石

備考　本年収穫ハ八月洪水ノ為メ秋作ハ凡六分ノ減収ナリ一反歩当リ収穫ハ平年ノ見込収穫ヲ掲ケリ

本村ニハ十数人ノ大地積ヲ有スルモノアリ各農場利別川ノ両岸ニ連続シ盛ンニ開墾ヲナセリ小作法ハ各農場ニヨリ多少其趣キヲ異ニスレトモ多クハ土地分与法ニ依リ可成資本ヲ節シ且ツ小作人ニ永住心ヲ起サシメントス左ニ其概況ヲ示ス

加藤農場ハ加藤政之助ノ開墾地ニシテ反別八百三十四町四反余歩利別川ノ北岸上ハカイマップヨリメップ川ニ亘ル大地積ヲ有ス此地元犬養毅等ニ貸付セシ土地ニシテ返地セシナリ現今ハ成功地百五十九町余歩小作人九十七戸アリ小作法ハ一戸ニ五町歩ヲ配当シ毫モ開墾料及ヒ米噌ヲ貸給セス成功ノ上ハ其情況ニヨリ成功地ノ六分乃至八分ヲ分与ス開墾中ハ鍬下五ケ年ヲ与ヘ小作料ハ四等ニ別チ一反歩ニ付三十銭乃至一円トス地味ハ樹林地卑湿地相交リ概シテ肥沃ナレトモ卑湿地ハ大排水溝ヲ穿チ乾燥セシ後ニアラサレハ耕作シ難シ全地成功ノ期ハ尚遠シト云フベシ

北海道拓殖会農場ハ利別川ノ北岸字チブタウシナイニ在リ総反別百六十六町余歩アリ会主今村藤次郎専心之レヲ経営シ目下成功地八十三町歩小作人四十戸アリ小作法ハ開墾費トシテ一反歩ニ付金二円ヲ与ヘ且ツ三ケ年ノ鍬下ヲ付ス而シテ小作人配当全地ヲ成功シタルトキハ無償ニテ一町二反歩ヲ譲与スル事ヲ約ス貸付地内ニ戸長役場、郵便局、商店等アリ本村ノ中心ナリトス

青木農場ハ利別川南岸ニ在リ丘陵ニシテ卑湿地ヲ交ユ瀬棚村ノ高野泰次郎ノ貸付地ナリ現在小作人七戸成功地十二三町ニシテ昨今ノ着手ナリトス

利別農場ハ東京市樫村清徳外四名ノ共同事業ニシテ利別川南岸ペンケオイチャヌンペ川ニ沿ヒ卑湿地多ク総反別七百二十町九反余歩トス明治三十年ノ貸付許可ニ係リ現在小作五十二戸成功地百三十余町歩アリ本農場ノ小作法ハ他農場ノ如ク小作人ニ土地譲与ヲ約セス道路排水総テ農場主ニ於テ施設シ開墾中ハ小作人ヘ米噌、農具料ヲ貸与シ一反歩ニ付二円ノ開墾料ヲ給シ鍬下三年ヲ附ス本地ハ其大部分ハ湿地ナルヲ以テ数千間ノ大排水溝ヲ設ケサル可ラス其起業費ヲ要スル巨額ニ事業頗ル困難ナルヘシ

南金原開墾場ハ静岡県人金原明善外一名ノ事業ニシテ利別川南岸パンケオイチャヌンペ川筋一帯ノ地ナリ反別二百六十四町二反余歩明治三十年ノ貸付ニ係ル樹林地卑湿地相半シ樹林地ハ肥沃ナレトモ卑湿地ニハ泥炭地ヲ交エ大改良ヲ要ス小作人ニハ一戸四町歩ヲ割付ケ開墾中ハ米塩ヲ仕送リ全地成功ノ上ハ開墾料トシテ金四十八円ヲ給与シ猶一町六反歩ハ無期小作料ヲ徴収セサル契約ナリ現今ノ成功地ハ百六十二町歩小作五十一戸アリ当開墾場ハ事業著シク進歩シ其全地成功ヲ見ル或ハ予期ヲ待タサルヘシ

白石農場ハペンケオイチャヌンペ川ノ上流利別農場ノ東南ニ連リ総反別三百二十四町八反余歩アリ愛媛県人白石弥一外一名ノ事業ニシテ現今小作七戸成功地十五町歩アリ小作法ハ一戸ニ五町歩ヲ配当シ成功ノ上ハ二町五反歩ヲ小作人ニ譲与スルモノトス

西田農場ハ利別川ノ南岸ノ西端ニシテ全地殆ント卑湿地ナリ瀬棚郡梅花都村西田元吉ノ貸付地ニシテ総反別二百二十二町七反余歩明治三十年ノ貸付ナリ現在小作七戸成功地六七町歩昨今事業ニ着手ス小作人ニハ成功地ノ七分ヲ小作人ニ譲与スル契約ナリ

北金原開墾場ハ利別川北岸区画地ノ北端ニシテ概ネ高台地ナリ総反別百七十五町一反歩静岡県人金原明善外一名ノ事業ニシテ明治三十年ニ着手シ目下小作人三十戸成功地百三町歩アリ小作法ハ南金原開墾場ニ似タリ

右ノ外南岸ニ竹田伝五郎百二十町歩加藤重兵衛百二十九町余歩ノ貸付地アレトモ未タ事業ニ

7ページへ

着手セス其他野本矩正、田中啓造、古畑治三郎、松前譲、細小路熊次郎、須田栄治等ノ十万坪乃至二十二三万坪ノ貸付地アリ皆三四戸乃至五六戸ノ小作人ヲ入レテ開墾ニ従ヘリ小作法ハ概ネ前記大地積開墾者ト略ホ相似タリ

馬　全村ニ馬匹六十頭アリ

商業　明治三十年戸長役場設置以来商賈来住シ目下木綿類、荒物、米噌及雑貨ノ小売店五六アリ皆瀬棚市街地ヨリ商品ヲ仕入レ村民ニ供給ス物貨ハ皆馬背ニ由テ輸送スルヲ以テ頗ル不廉ナリ村民ハ重ナル品物買入レニハ瀬棚市街ニ出ツルヲ常トス

木材薪炭　木材ニハ椴角材及ヒ楡、楢等ヲ枕木トシテ出ス椴角百石ノ価凡七八十円雑木角ハ四五十円ナリ薪炭ハ村民自ラ之レヲ採リ薪一敷ニ付一円炭一俵三十四五銭位ニ当レリ

鑛業　利別川上流ニハ砂金ヲ産ス昔時箱館奉行ニ於テ人夫二十余人ヲ遣シテ採掘シタリシカ長州藩征伐ノ頃廃業セリト云フ今其地ヲ元金山ト称セリ現今ハ利別川支流サックルヘシペヨリカニカンヌプリノ麓ニ亘ル利別川両岸一帯ノ地ハ東京市雨宮敬次郎ノ砂金採拾借区地ニシテ一時盛ンニ採収セシカ近年大ニ衰退シ昨今ハ僅カニ二十余人ノ之レニ従フモノアルニ過キス其産額スル甚タ多カラス一ケ年凡二貫目内外ナリ又ピリカペツ、ニセウンペツニ跨リ満俺鑛アリ函館ノ田中正右衛門ノ借区ニシテ現今数百人ノ坑夫ヲ使役シ一ケ年ノ採掘高凡百四十二三万斤ト云フ鑛山ヨリ胆振国山越郡国縫マテ木軌ヲ敷設シ日々幾十輛ノ台車ヲ以テ搬出セリ其他利別川左岸ニ於テ満俺鉱右岸ニ於テ金鑛ノ試掘許可ヲ得タルモノ各二ケ処アリ

地価　土地ノ売買未タ少キヲ以テ精確ナル調査ヲ為シ難シ普通見込価格ハ一反歩ニ付凡五六円乃至十円ヲ最高トスルカ如シ

生計　村民中三四ノ商人ヲ除クノ外ハ皆農ヲ以テ生業トナス移住ノ日尚浅キヲ以テ生計ニ余裕アルモノナシ殊ニ明治三十一年及三十二年ノ水害ニ罹リ沿岸低地ニ在ルモノハ頗ル困難ニ陥リ人気大ニ阻喪セリ農民ノ副業トナスハ只養蚕業アリト雖モ僅々十四五戸ノ之レニ従フニ過キス皆野桑ヲ以テ飼育シ昨三十一年ノ収穫ハ繭五石一斗三升ナリ薪炭材ニ富ムモ海岸ヲ距ル事遠クシテ運搬ニ困シ得失相償ハス冬期ハ只伐木ヲナシテ開墾ノ準備ニ従事スルノミ婦女子ノ如キハ全ク休業ノ姿ナリ

風俗人情　農民ハ性質稍素朴ノ方ニシテ民情穏カナリ利別川北岸ノ部落ニハ僅少ノ柾屋ヲ見ルモ概ネ茅屋ナリ南岸ハ全ク掘立小屋ニシテ一見新移ノ農民タルヲ知ル

教育　稚父多内ニ一ノ尋常小学校ヲ置キ埼玉部落、利別農場等三ケ所ニ簡易小学校ヲ設ケリ然レトモ区域広ク通学不便ナルヲ以テ尚二ケ所ニ増設ノ計画アリ簡易小学校ニハ重ナル開墾者ニ於テ多少ノ寄附金ヲナスモノアリ教育事業ハ未タ甚タ不完備ヲ免レス

衛生　村医一名ヲ置キ字稚父多牛ニ在リ飲用水ハ井水又ハ川水ヲ用フ卑湿地ノ水ハ飲用ニ堪ヘサルヲ以テ概ネ利別川ヲ用ユ

社寺　未タ公ニ届出タル神社ナキモ各部落ニ社祠アリ又秩父多牛ニ真宗ノ説教所一ケ所アリ

し，風俗部長として活躍していた．明治23（1890）年矯風会は「婦人の議会傍聴禁止撤回陳情書」を提出．神聖な国会に女性が入ると汚れるので議会に入ることを禁止しようとの提案に猛然と反対運動を起こした．この運動が功を奏して国会開設時にはこの項目は撤回されていた．この矯風会の会長は，徳富蘇峰・蘆花らと親戚であった矢島揖子（かじこ）であり（第２図），メンバーの中に佐々城豊寿がいたので，大久保音羽婦人は志方之善を荻野吟子に紹介したのである．佐々城豊寿の娘信子は国木田独歩と結婚したことは広く知られている．佐々城家は，仙台で医者をしていて伊達一族が大勢北海道に移住することの中心になって働いたので広い人脈を持っていた．特にクラークの教えを受けた札幌農学校の卒業生は，キリスト教徒の結びつきで固いものがあった．明治20年代前半（1890年前後）は，熊本，横浜，札幌でのキリスト教の活動が目立つが，その具体的な姿をこの矯風会の動きに見ることができる．大久保音羽婦人としては，単に北海道開拓の情報を得る便宜を図るつもりが，事態は予想しない方向に向かった．

５．志方之善と荻野吟子との結婚

荻野吟子40歳．日本女医第１号で名声もあり，実力もある．一方，志方之善26歳．同志社神学校の学生．この２人が結婚したのが明治23（1890）年11月25日．周囲の人々はアッと驚いた．

６．志方之善・丸山要次郎のインマヌエル入植

明治23（1890）年，志方は，北海道開拓の構想が固まると同志社神学校の先輩の小北寅之助牧師を訪て熊本県自由党首田中賢道に紹介してもらうようにお願いした．小北寅之助の義兄が田中賢道であったので話は早かった．田中賢道は，丁重な紹介状を犬養　毅宛に書いた．志方はこれを持って犬養　毅事

務所を訪問した．応対に出た一木富太郎秘書は志方に会ったがこの若者に開拓が出来るかと一抹の不安があったが田中賢道の紹介状もあるしむげに断ることもできないので，仮契約を結び現地を見たうえで本契約を結ぶ方策を取った．明治24（1891）年５月，志方之善（27歳）と丸山要次郎（17歳）は，横浜港から出航して，瀬棚の梅花都港に上陸した．それから利別川を逆上り，目名川が利別川に注ぐ地点の左岸に落着くことにした．ここに平成３（1991）年神丘百年を記念してイチイの木で史跡標柱を建てた．横浜を出航して十数日が経過していた．２人は，開墾に取りかかったが，慣れない作業のために思うようには進まなかった．蕗（ふき）や笹の子等を塩漬けにし，鮭・鱒などを貯蔵した．犬養　毅事務所と本契約を結び，キリスト教徒の移住を促進するために，志方之善はいったん京都に帰り，17歳の丸山要次郎だけが現地に残る事になった．要次郎は，木彫の作品を瀬棚に売りに行ったり，１合の米で２週間食いつないだり，40日間も蕗の塩漬けで飢えをしのいだりして，越冬した．翌明治25（1892）年春，志方は母しの（70歳）姉しめ（32歳），同志の原田策郎，笹倉七郎，松田弥三郎等と揃って入植した．しめが中心になって開墾作業を進めたために大いにはかどったという．

７．天沼家の入植

埼玉県旛羅郡長井村の天沼恒三郎らは，当時最も一般的な，関係書類を役所に提出して土地貸し下げを待つという方法を取った．そのために，役所に提出する書類は膨大だがなかなか土地貸し下げ決裁が出ないという北海道の開拓政策の悪弊に遭遇した．天沼恒三郎が役所に提出した書類は下記の通り．（1）北海道入植のための「団体成業規約書」（2）北海道移住開拓願書（3）天沼家の戸籍証明書（4）太櫓郡太櫓村官有地貸付願書（5）北海道団結移住開拓志願につき準備手続書（6）北海道移住開墾事業希望につき嘆願書

８．山崎家の入植

山崎家は，明治26（1893）年に山崎六郎衛門が渡道して以来現在まで続く神丘の“旧家”のひとつである．入植には以下のようないきさつがあった．

北海道の鉄道は，明治20年代（1890年前後）石炭を求めて伸びて行くが，北関東の鉄道は繭を求めて伸びる．明治25（1892）年関東平野から日本海側に抜ける碓氷峠トンネル工事が完成したため，今までこの峠越えを一手に引き受けていた鉄道馬車会社は解散する憂き目にあった．社長の大越米吉は，同時に高崎を拠点に組員400人を擁する博徒の親分であった．ここで身の振り方を思案していた時に天沼恒三郎から神丘に入植しないかとの誘いが山崎六郎衛門にあり，六郎衛門は家族とともに渡道したのであった．

その当時の様子を，山崎六郎衛門の三男・山崎喜三郎（故人；渡道時は８歳）が自ら語ったものが録音テープとして残っている．慎ましい生活の中，信仰一筋に生きてきた人生が語られており，当時の様子がよくわかる第1級の資料なので，今回ご子息山崎淳平氏のお許しを得て，以下に資料３として全文を紹介することとしたい．本回想録は，昭和37（1962）年に今金の五男淳平氏宅にて，山崎喜三郎の喜寿祝いの席で息子の嫁と孫の前で語ったものである．文章化の作業に当たっては，録音音声そのものを文化財資料と考え，極力話者の発音を復元することにしたため，現在では差別的用語とされるものや，方言および口語表現のために読みにくさを伴う部分も一部にみられるが，純粋な資料の記録・公開という観点からご容赦願いたい．また，（　）内の注と小見出しは便宜上筆者がつけた．

資料３　山崎喜三郎氏の回顧録

賛美歌87番

87番の賛美歌をみんなで歌います．この賛美歌は，私の父，山崎六郎衛右門が，群馬県高崎の大越米吉という人に導かれてキリスト教の信者になったのですが，その大越さんの大好きで，いついつも愛唱していました．お宅に伺った時，これを掛け軸にして床の間に掛けてありました．その導かれた父が，やはりこの87番（恵みの光）を常に愛唱していました．3代目の私が父に習っても，この歌が一番好きで常に歌ってきました．で，この賛美歌をみんなして歌ってもらいます．人生わずか50年．70歳は古来稀なりと言われてきましたが，私は神様のおん守りの中に，その稀なる70歳を突破して，しかも喜の寿と言われる77歳の今日まで生き長らえましたことは神様の深いおん恵みによるものとして深く感謝しております．

賛美歌87Ｂ

「めぐみのひかりは　　わがゆきなやむ
やみ路を照らせり，　神は愛なり．
われらも愛せん　　あいなる神を，

うき雲おおえど　　み顔の笑みは
さやかに照りいず，　神はあいなり，
われらも愛せん，　　あいなる神を．

うれいのときにも　　のぞみをあたえ，
なぐさめたまえり，　神はあいなり．
われらも愛せん，　　あいなる神を．

ものみなうつれど　　めぐみのひかり，
とわにぞかがやく，　神はあいなり．
われらも愛せん，　　あいなる神を．」

北海道開拓の立志

思い返しますればまる70年．猛獣の熊をはじめ，あらゆるけものが生息し，大木が鬱蒼と生い茂って日中でも太陽をはっきり見ることのできない，全くの原始林であったインマヌエルの地に入植しました．

その当時，交通が如何に不便であったかを申しあげれば，高崎からの手紙は20日以上もかからなければきませんでした．時には，ずっと後から出した手紙が先についたり，また，ある時は，少しまぐれた手紙は，半年以上もかかって配達されたこともありました．

私は明治19年６月14日群馬県碓氷郡坂本という小さい町に生まれたのであります．父が私たち数多い子どもたちの将来を思い，北海道開拓の志をたてたのでありました．さらに，大越翁が「開拓の当初は，とてもとても困難が伴うのだが，将来は必ず子どもたちをみんな近くに家を持たせ，罪のない農業を楽しくできるのだから速やかに渡道しなさい．必ず援助の手は続ける．」とのお言葉．父は，実父以上に信頼しておった大越さんの激励の言葉に少しの躊躇もなく，断然，渡道を決行したのでありました．

北海道に向かって

それで，明治26年５月半ば高崎駅から乗車し，東京の上野着し，当時有名であった「がんなべ」という食堂で昼食をすませ，かけあし同様に動物園その他を見物して，夕刻，新橋駅から横浜に着いたのであります．ところが，北海道行きの汽船がないので４日も滞在致しました．ようやく，「山城丸」というかなり大きな汽船が函館行きというので，ただちに乗船致しました．幸い，好天に恵まれ，波もなく，仙台沖の金華山，くじらの潮を吹くのなどを眺め塩釜港に一泊し，翌々日函館に投錨しました．函館に上陸し，山田という旅館に投宿し，ところがここでも，また，瀬棚行きの汽船がないので３日も滞在いたしました．

回漕店に交渉の結果，寿都行きの後志丸を特に瀬棚につけてもらうことに話が決まり，いざ上船と波止場に行き，艀（はしけ）に足をかけたとたんボーと汽笛一声．その後志丸は出帆してしまいました．船頭が如何に懸命に漕いでも，もうあの船には追いつけないというので，私たちはいったん宿に引き返しました．それは，旅館の番頭が不注意のため出帆の時間を間違えておったのでありました．さあ大変，こちらの回漕店から江差の回漕店に電報を打ってもらい，私たちの着くまで待ってもらうことにして，二台の馬車を借り切り私たち親子７人と父が２年ほど使用していた野上英満（21歳）奉公人と，現在今金の街の由浅食堂の先代由浅為太郎（22歳）の青年と同勢９人が２台の馬車に分乗し，五稜郭，亀田，桔梗，七飯と一気に走らせ，元の本郷にて馬を取り替え，あの険しい中山峠も無事に越し，江差間近になって日が暮れてしまいました．江差の灯がちらり見え始めたとき，港で汽笛が鳴

りました．これを聞いて，また，乗り遅れたのでないかと一同大きな心配をしました．それでも，駆けつけてみましたら，その船は入港したばかり．さっそく船に乗り込み一夜をあかし，翌日午後1時ころ三本杉に上陸いたしました．

瀬棚での生活

当時瀬棚の町にはアイヌの人の家と合計30戸ほどの家よりなかったのであります．商店としたものは，三本杉に「山に一ダ（屋号）」という極貧弱な雑貨商がただ一軒，旅館としたものは会津の街に山一大島勘左衛門というただ一軒．そこの主人勘左衛門さんには何かと便宜を図っていただき，随分お世話になりました．そして，父たちは，わらじに足をかため，各々が，縄，筵（むしろ），道具，食料，寝具などを背負いまして4里の道をインマヌエルの地に小屋掛けに上ったのであります．

残ったのは母と８歳になる私と弟と妹の４人でしたが，何分にも旅館には座敷としたものは２間しかないので，長く私たちを置くことはできないというので，主人がアイヌの空き家を借りてくれました．戸じまりのない，すごいあばら家に10日あまりも住まったのであります．そうしておるうちに，たちまち私がアイヌのコスポと仲良の友達になってしまい，ある日私がマッチを持って遊びに行き，コスポと２人で風よけにしたあった丈の高いドンコ（イタドリ），これを細かく折り，火をつけ始めた時にハポに見つかり大目玉をくらい逃げて帰りました．ハポというのはお母さんのこと，コスポというのは少年のこと，青年のことはヘカツ，女子青年のことはメノコといいました．そのメノコが結婚すると口に入れ墨をするのが，アイヌの風習でありました．そのハポは，酋長の連れ合いでもあったのか，とくにピーンとはねあがった入れ墨をし，ものすごい体格のいい，一見鬼のように思われる．そのハポが私の後を追いかけるようにして母のもとにきて，ことばは分かりませんが，「子どもにマッチを持たせ，危ないでないか．もし，火事になって小屋が焼けたらどうするか！」との意味を大きな声でどなりつけました．母は恐ろしさのあまりぶるぶるふるえながら平身低頭，両手をついて平謝りに謝罪したのでありました．これを見て私は，「ああ，悪いことをした．母をこんな目に合わせて本当に済まなかった．」と後悔をしました．

インマヌエル（神丘）に向かって

さあ小屋もできた．荷物もだいたい運んだ．「さあ，行こう！」と父は，適当な荷物を背負い，清太郎は３歳になった妹を背負い，母はわらじの履き方を知らないので，父に履かせてもらい，おまけに臨月の間近い大きなお腹をかかえながら，トボトボと歩行しました．丹羽さんのお宅の付近までは，どうにか道路として形づくられてありましたが，それからこっち，一里あまりは，僅かに笹を刈り分けただけ．さかさ川，フシコ，メナ，チョポシナイと４本の川にはどこにも橋がかかっていません．こちらの岸の木を切り倒し，向こう岸に渡しその上をかろうじて渡り，ようやく着いた所に，前にも後ろにも垣根がなく寝ていて月も星も見ることができる笹ぶきの拝み小屋．母は感極まってか，声をだして泣きだし，何かと父に不平をつぶやくのでありました．なかなか小屋の中に入ろうとしませんでした．さすがの父も，これには閉口しました．

インマヌエル（神丘）での生活のはじまり

そうした後のある日，やせた背の高いアイヌのおやじがマスを２本下げて来て，父の前に突き出し，これを買えとのことでありました．父が何ほどかとたずねましたら，お金でなく米と交換しろとのことでありました．米なら何ほどと言いましたら，３杯くれとのこと，さあその３杯が分からない．茶碗に３杯か，お皿に３杯か，でも，母は，やぱり１升ますのことだろうと３升の米をやってしまいました．さあ，それが大失敗．あとで分かったのでありまするが，その１杯というのは２合５勺のことでありました．とぼしい中から３升の米をやってしまい，残り少ないので，お粥をすすりながらそのマスを刺身にして食べました．

そうして，翌７月の半ばの頃，少し強い雨が降ったと思いましたら，あの利別川が氾濫し，大洪水となりました．父は，こうしてはおられないぞと兄たちと水を漕ぎながら近くにあった細い木を切り集め，小屋の中に２尺くらいの高さの棚をつくりました，その棚の上に避難をしました．みるみる，どんどん増水するので母は，もうだめだ！みんな離れ離れにならないように，身体と身体を縛り会い，ともに死のうと覚悟をしたのでありました．でも，床の上まで水が上がらないで，水は引けました．

その水が引けるのと同時に，母は産気をもようしたのであります．医者もなければ，産婆もない．困り切ったその時に，昨年，一昨年95歳で昇天されました天沼のおばあさん，当時29歳のおばさんが，産婆の経験は更にないのですが，何かと親切に世話をしてくれましたので，その棚の上で男の子を安産致しました．そうして，秋も濃くなりました頃，家中の者が全員サナダムシを出しました．私の場合なかなか出て来ないので，兄清太郎が棒切れにからませ，静かに出してくれました．それは，とても大きいので地面に引き出して見たところ12尺もありました．

いよいよ正月がきたのに餅をつくことが出来ませんでので，兄常次郎は，３里向こうの鋸という部落（今の北檜山町字豊岡）九左衛門という農家がありまして，その九左衛門さんに頼んで粟の白を４升分けてもらって来ました．それで粟餅をつき，だしも何も入らない，ただの大根葉の味噌汁で粟餅の雑煮を作り，これを食べて元旦

をお祝したのであります．

雪解けを待って早々に開墾と蒔きつけに励んだのであります．夏ともなりましたら，蚊とブヨとの大群が襲撃し，日中でも農場の仕事が出来ないのでボロを縄にない，それに火をつけ，腰に下げて仕事をした．そうして夕方になるとヨモギ，その他の雑草を刈り集め，小屋の入り口でいぶすのでありますが，そんなことに少しも恐れず，小屋の中はワンワンワンとむれかえるほどでありまして，どうしても茶碗を持って食事することが出来ないので蚊帳の中で食事しました．おまけに　蚊のマラリヤ熱（オコリ）と言うのが流行しまして，親子３人，４人が枕を並べて，うめき苦しんだ場合もございました．こうした事は，１年や２年でなく，５年も６年も続いたのでありました．その年もたびたびの水害と霜の早いので，作物は皆無の状態でありました．食料確保というので手橇をこしらえて，雪の降るのを待って兄が鋸（北檜山町字豊岡）から芋を2俵も３俵も積んで縄をかけ，えんやら，えんやらと３日も続けて運搬したのであります．今日はいつもより帰りが遅いなあと話しておりました時に，「とった，とった，とったぞ！」と元気な声で帰って来ました．何を捕ったのかと飛びだしてみると，水かきのついた足の短い，丸太を短く切ったようなカワウソが俵の上に乗せてありました．それは当時，タマという男犬を飼っておりましたが，その犬がいつも兄の後について歩いていたのであります．その日，丹羽さんのこちらの沢に来たとき，その犬が川に飛び込み，カワウソと格闘し，ついにかみ殺したのでありました．それを翌日調理しまして，近所の人たち４，５人を招いて試食の会をいたしました．

教会をつくろう

その翌年，まだ，どこの家でも冬の吹雪の夜など布団の上に１，２寸も雪が積もるというひどい小屋に住まっておりながら，教会を建てようという相談が始まったのであります．そうして，めいめいが，急いで秋の農場をかた付け，６，７人の信者が心をあわせ，労力を持って建築に取りかかりました．いよいよ明日は，屋根葺きだという日に雪が降り始め，翌朝はかなり雪が積もっておりました．時に父は，「ああ困った，わらじがきれてしまったし，履くものは無くて困ったなあ．」と母と話しておりました．そうした時に私が，学校へ行っておらず，退屈まぎれに，いたずら半分に“つまご”という藁靴を作ってみました．その藁といいましても，絶対に手に入らないので夏の土用過ぎ野に生いておる“くど”という草を刈り取って，それを乾燥しておき，縄にない，わらじを作ったのであります．そのくどで大人の履く“つまご”を作ってみましたが，恥ずかしいので，隠しておきました．父が困るというので，それを出してきて，父の前に出して履いてみなさいといいましたら，父は私の顔をみて，「よく，おまえこれを作ったなあ．ああよかった本当に助かった．」とたいそう喜んでくれました．その時の顔が今なお瞼に浮かぶのであります．そうして年内に教会は落成いたしましたが，年あけて２月頃に簡単な落成式を行いたいとの話が出たのでありますが，何ぶんにも御馳走をこしらえる材料がなかったのであります．その頃，兄が野うさぎをとろうと，いくつも罠をかけておきました．ちょうどクリスマスの朝，大きなうさぎが１羽とれましたので，兄が喜んで小屋の中に吊るしておきました．２，３の信者の方が私の家に集まって来て，これを見て，ことに山本助太郎氏（現在の山本起男氏の祖父）が，「これはよかった．これは神様の恵んでくれたのだから，与えられたのだから肉のご飯に作りましょう．」とただちに料理にかかり，ついでにたぬき汁ならぬ，兎汁も作るんだと，その肉を板の上に上げてガンガンガンとたたきつぶし，小麦粉を入れて汁を作ったのでありました．できたから先に食べさせようと，子どもらといっても10人ばかりでありました．中でも大食漢の私と天沼卓美君と，このような御馳走は４年間この方，拝んだこともないので，めずらしいやら，おいしいやら，食うわ，食うわ，12，３杯も食べてしまいました．それで，あとから，食べる大人の分が足りなくなってしまいました．

第一利別尋常小学校（神丘）ができたが，教会で学ぶ

そうして14歳になった年に第一利別尋常小学校（神丘）という児童20人位より収容のできない学校としたものが建ちました．14歳にもなって，小学校１年生ではなあ，というのと，仕事をすれば１人前にできるのでありますから，とうとうその学校へは１日も行かずにしまいました．そうして青年となりましてから教会の牧師の転任，赴任，宣教師の送り，迎えを国縫まで10里の道を私が１人でやってきました．馬車で，駄馬で，橇でしたのでありました．ふしぎなことには，学問もなく，無知な，算数といえば算盤の持ち方も知らない本当に愚かな者を神様は教え導いてくれ，教会の役員としたものを35年続けました．ことに会計を担当すること21年，会計といいましても出入りが少ないので大したことは無かったのでありますが，一番辛かった事は，相良牧師さんをお迎えしてひと月の謝礼が6000円．終戦後むやみに物価が暴騰して１升瓶の空いたのが百円もしたというのに，５人ご家族が6000円のお金でどうして過ごしていかれましょうか．でも，先生はこんな僅かなお金でどうするかということは顔色だに表さず，私の差し出す6000円のお金をおし頂いて，「いつもこんなに心配して申し訳ない．」と頭を下げられたのであります．その都度，その都度，私は，涙のにじむほど辛かったのであります．というのは，私の家内は，骨髄という難関な骨の病にかかり，左の足を切断まで６年かかり，ついに13年にこの世をさりましたが，その間の医療費に山林15町歩，畑地７町歩を失ってしまいました．その上，山ほど借財が残り，どうにもならないのでありました．ですから，自分が１銭も出さないで，信者の方々に「お前も献金しろ．あんたももっ

と献金を増やしてくれ．」と言いかねたのであります．

瀬棚の海津さん・天満さんとの出会い

昨日，瀬棚の海津さんと天満さんからお祝いの言葉に記念品を添えて招待致しました．本当に感謝の気持ちで一杯でございます．

思えば14年前の昔，相良先生が瀬棚方面に伝道を開始し，海津さんのお宅に30人，40人の子どもをあつめて火曜学校を続けておられました．ある火曜日の日，先生のおともをして海津さんのお宅にお邪魔致しました．時に海津さんでは，お寺の総代をなさっておられるにもかかわらず，キリスト教の牧師を招いて，しかも，２階の立派なお座敷2間を開放し，30～40人の子どもを集めての火曜学校を続けておられるので，私は何か不思議の感にうたれました．でも，ご夫妻ともに信仰にはいられバブテスマをお受けになられ，まことのクリスチャンとなって今日まで，大きなご奉仕を続けられたのに，私は敬服しております．この23年間神丘に定住し，困難と戦い，尽くして来られた遠藤栄牧師が73歳にして昇天されました．その牧師さんの石碑をたてたいと思いたちまして，適当な石材を物色しておりました．ある用件で三本杉に参りました時に役場の前に，高さ５尺たらず，幅は広い所で１尺８寸，厚さは５寸か６寸という本当に適当な石を目に入れました．こうした石なればなあとしばし見とれておりました時に，そばに薪を小割りしておった人が，「それは，役所の石ではありません．天満さんが，青年たちのために何か歌を刻んで橋の袂に建てるんだ，とここに置いてあるんです．天満さんに頼んだら分けてくれるのじゃありませんか．」と言ってくれました．その時天満さんがトンネルの方に向かって急ぎ足で通られました．その人は，「ああ，天満さんが通る．とめて，話してみたらどうですか．」と言ってくれましたが，急ぎの天満さんの足を止めて話をするのは，何か失礼でもあるような気がしてその日は帰宅した．後日，相良先生とご一緒し，海津さんのお宅に行き，海津さんにその話を致しましたら，「今晩，天満さんが集まりにくるのだから一緒に話をしましょう．」といってくれました．そうして集まりの済んだあと，天満さんにお願いしたら，「牧師さんの石塔を建てるんならあげますよ．」簡単に，しかも，こころよく，寄贈してくれました．私は，耐えられないほどうれしく感じたのであります．そうしたことが始まりでありましたが，天満さんも洗礼をお受けになられ，熱烈なる信仰をお持ちになって，手間も暇も惜しむことなく，ことに多額の私財をささげて社会のために大きなご奉仕を続けてこられました．こうした天満さんのご夫妻，天満さんが主に会って兄弟姉妹となり善き信仰の友となって頂きまして，大いに力づけられ，励まされておりますので本当に喜びに耐えません．感謝でございます．どうかこの先も，教会のため，地の栄のために，ご奉仕を続けて下さいますようお祈りするものであります．

相良先生はじめみなさんに感謝

私が，心から信頼し，心から尊敬し，心から慕うて参りました相良先生には，ここ10数年，特に私を愛して下さいまして，何かと教え，助け，導いて下さいましたことは感謝にたえません．お礼の言葉もございません．どうかこれからも，長く，長く，この世ばかりでなく，限りのない天の御国にまで，良き先生であって，愛し，導いて下さいますよう心からお祈り致します．

石橋さんには，これまで何かと随分お世話になって，ついぞ言葉を巧みにしてお礼を申しあげたことはございませんが，心の中に絶えず感謝をしています．これからの私は，日に日に肉体が衰え，従って精神もまた鈍っていくのでございますが，どうか，旧来通りご愛顧賜りますようお願いいたします．

今日はありがとう

今日ここに集うてくれた，かあさんたちは，みんな揃って善良なよいかあさんたちばかり．そうして孫たちであるあんたたちみんな肉体は壮健であり，そうして一人として不良もなく，一人として悪党もなく，みんな素直な柔和な良い孫であるので，私は，この上ない喜びでありまして神様に感謝しているのであります．どうかこれから先き，言葉が，あんたたちのおこないが，全く主イエスキリストの御心にかない，神様に喜んでもらうことのできる立派な人間になってもらうよう願います．そうして切に切に神様にお祈りを捧げるものであります．
みなさん，今日は本当にありがとうございました．

９．第３回大日本帝国議会で北海道開拓事業が取り上げられる

明治25（1892）年５月２日，第３回大日本帝国議会が開催された．前年の12月25日わが国で最初の議会解散となった．内務大臣の品川弥二郎，次官の白根専一郎らが，全国の地方官に選挙大干渉を命じた．その結果，死亡者25名，負傷者388名に達した．与野党の対立が激化するなかでの議会開会となった．藩閥政治の弊害として，薩摩藩出身者が道庁の要職を占めていた北海道開拓事業がやりだまにあげられた．犬養　毅，尾崎行雄らは，改進党に属し選挙大干渉を厳しく批判ていたが，その２人が神丘に大土地の貸し下げを受けていたので世間の注目を集めた．この部分の議事録を資料４に示す．

資料４　大日本帝国議会議事録（大日本帝国議会誌１，1814ｐより）

明治25年５月10日
河野広中君，工藤行幹君より北海道殖民開拓に対する施政方針　北海道官有物払下げの件，北海道観業委託金処分の件，札幌製糖会社及び札幌製麻会社の件，北海道土地貸付の件，炭鉱鉄道線路変更の件に付政府へ質問書を提出せられたり
北海道土地貸付の件
北海道拓殖の業を挙げんと欲せば土地の貸下を便するより急務なるはなし然るに土地貸下願書の道庁に堆積するもの数万件の多きに及ひ甚だしきは三四箇年して尚未に指令を得さる者あり之に反して或者は数百万坪以上の貸下を出願して容易に許可を得たり今其重なる者を挙くれは左の如し
一億五千万坪を三条實美外二名に　九百十七万千三百九十坪を鹿島万兵衛に　百八十九千四百五十七坪を摺口文造に　四十万坪を山田顕義に　百六十万坪を菊池武夫外十七名に　二百三十万坪を森本義質に　百二十七万六千坪を滝本五郎に　二千二十五万坪を犬養毅外八名に　三百万三千百五十を佐藤昌介に　一千万坪を岩谷松平に貸下たる等是なり
以上払下の現況は如何にして今後幾箇年にして開墾をなし得る見込なるか此払下地の内原地の儘他人に売買譲与せしものあるや否や

10．北海道開拓政策の見直し

時の政府は，実情を調査して指摘のようなことがあれば改めることを約束した．そのためには開庁以来続いて来た薩摩出身の北海道長官でなく，他の地域からの起用が必要であった．第４代北海道長官は，長野県出身の渡辺千秋となった．この後を継いだのが北垣国道である．貸し下げを受けて開墾していない土地を調査してこれを返却させた．

11．鈴岡への入植

明治29（1896）年に金原明善の小作人が主に石川県，福井県から移住した．この土地は，犬養　毅らが返却した土地であった．最初のころは，ここを北金原といっていた．

12．まとめ

神丘の黎明は，近代立憲政治の確立期を色濃く反映していて興味がつきない．この小論は木俣　敏の『悠久なる利別川の流れ』に多くの示唆を頂きましたことに記して感謝を表する．

文　献

若林　功，1964，二　渡島半島の開拓異彩．加納　一郎　改定，北海道開拓秘録（3），時事通信社，43-90.
木俣　敏，1994，悠久なる利別の流れ．利別教会創立「百周年」実行委員会，284p.
今金町神丘地区開基百年協賛会編，1991，黎明―神丘地区開基百年記念誌―．313p.